

特集
藍より青き吉野川
川と人のかかわり

Special Features
The Blue Color Yoshino River rather than in Color Indigo
Mankind and the River

これからの吉野川
The Yoshino River in the Future

知られざる吉野川の魅力

田村英夫

TAMURA Hideo

吉野川源水をはくむ会/副会長



1 日が上り、日が沈む川 吉野川

吉野川の春は、川岸の菜の花とともに訪れる。「日が少し長くなったな」と感じ始めると、第十堰周辺の河川敷は黄色い菜の花に彩られる。堤防に上がると、突然、目の前に一面に黄色い菜の花が広がり、息を呑むような鮮やかさだ。

この菜の花に誘われるように、阿波路は四国八十八ヶ所巡礼のお遍路の姿で賑わい始める。自家用車や観光バスでお参りする人がほとんどだが、最近では歩いてまわるお遍路も多く、白装束姿のお遍路が、菜の花のそばを通り過ぎていく風情は、この季節ならではのものである。

西日本第一の高峰石鎚山に近い瓶ヶ森に源を発した吉野川は、四国をほぼ東西に縦断して流れている。途中の高知と徳島の県境付近では、急に流れを変えて北

上し、四国山地を切り裂きながら断崖絶壁のつらなる大歩危、小歩危の景勝地を生み出している。その後、吉野川は、徳島県池田町周辺で再び流れを東に変えて、およそ70キロ先の紀伊水道まで一直線に注いでいる。

地図を開いて見てください。「坂東太郎」の利根川、「筑紫次郎」の筑後川とならんで日本三大河川に数えられている吉野川は、見事と言っていいほど西から東に流れているのが分かるでしょう。

住民投票で全国に名を知られた第十堰は、河口から14キロほどさかのぼったところにある。今からおよそ250年前の江戸時代につくられたもので、洪水のたび毎に流されるなどの被害を受けてきたが、その度に、改修を重ね、今日まで何とか持ちこたえてきている。

私は、この第十堰の近くに住んでいる。休日の夕方などには、この第十堰周辺をよく散歩する。西から東に流れる吉野川は、河口から日が上り、上流に日が沈む。この付近から眺める夕日が、格別美しい。はるか上流にかすんで見える四国山地の山の端に、夕日が刻々とこの日の終わりを告げながら沈んでいく。日が上り、没する川...それが吉野川である。

2 現代の藍のルートと吉野川

徳島が藍で栄えた藩政時代、阿波徳島の商船が全国に航海し、特産の藍を運んでいた。吉野川の流域で栽培された藍は、この吉野川を通して河口に集められた後、全国に運ばれた。また、逆に帰りの便で運ばれてきた全国各地の物資や文化がこの吉野川をさかのぼり、流域に広まっていった。徳島は吉野川を通じて、全国につながっていた。吉野川が、徳島の大動脈であった。しかし、この大動脈を支えた吉野川の舟運も、全国の川と同じように鉄道の発展とともに衰退してしまった。

平成10年4月、「夢の架け橋」といわれた明石海峡大橋が完成し、本州と四国が新しいルートで一つにつながった。大幅な赤字を出しているとして批判にさらされている本四連絡橋だが、このルートの開通によって四国が交通新時代を迎えたことは間違いない。

このルートにつながる高速道路の徳島自動車道は吉野川にほぼ平行して走っている。全国と徳島を結ぶ「現代の藍のルート」である。

徳島自動車道を東から西に向かって車を走らせると、吉野川流域の雄大な眺めを右に見ながらの運転となる。道は阿讃山脈の小高い麓に沿ってつくられているため、車窓からの眺めは非常にすばらしい。

徳島インターチェンジから30キロほど西に進むと、吉野川の流域は幅がぐっとせばまり、川がすぐ近くに見え始める。川岸のところどころに大きな竹林が見え隠れする。水防竹林だ。藩政時代に洪水による被害をできるだけ少なくしようと植えられたもので、昭和30年頃までは、両岸に連綿とつながっていたそうだ。吉野川を代表する洪水遺産のひとつだが、最近では堤防の整備にともなって次第に姿を消してきたのは、残念である。

さらに西に進むと、徳島自動車道はやがて吉野川を横切る。そのやや手前には、サービスエリアに隣接して吉野川ハイウェイオアシスがある。吉野川の景勝地のひとつ「美濃田の淵」がすぐ近くにあり、美しい吉野川の流れを愛でながら周辺を散策できる。また、徳島から車を運転してくると「ちょっと運転に疲れたかな」と感じはじめることで、ここで一休みする人が多い。いつも多くの車で賑わっており、高速道路と川が織り成す新しい吉野川の景観をつくりだしている。

3 水辺のルネッサンス

水辺への関心の高まりとともに、吉野川でも水辺を復

活するさまざまな試みが行われている。中流から下流にさしかかったところにある山川町の堤防は、根元が水に洗われてくずれかかったため、災害復旧工事として遊歩道のついた美しい護岸が2キロにわたって作りかえられている。水の流れを制御するために、川の中央に突き出している水制の石組みは、地元の要望を取り入れて、吉野川特産の青石をつかっている。また、川岸に自生していた樹木を景観の中にも取り込んで整備しており、周辺を散策する人の姿を見かけることが多くなった。

この付近は、かつては川の流れが堤防のすぐ近くまで迫っていて人が近づけないところだった。

吉野川では広い川原を横切って水辺まで到達するのは容易なことではない。夏に吉野川で水泳を楽しむ風景をほとんど見かけないのも、流れが大きすぎて危険だということばかりでなく、水辺に近づけないことも、原因のひとつではないかと思う。

しかし、吉野川には、まだまだ人に知られていないすばらしい水辺が多い。その一つが「旧吉野川」である。

4 再発見 旧吉野川

旧吉野川は吉野川の河口からおよそ16キロ地点の第十樋門からはじまる。延長は24.8キロで、かつては吉野川の本流筋だった。しかし、明治になって始まった河川改修工事で支流の別宮川が本流として整備されたため、旧吉野川と呼ばれるようになった。川の名前としては実に無粋だが、正式名称として決まって以来長年使われ、住民にすっかりなじんでいる。

かつて川は流れのゆるやかな平野部では、大水の度に流れを変え、豊かな大地を育んできた。旧吉野川もそうである。満々と水をたたえた川筋はくねくねと蛇行し、周辺の田畑を潤し、工場や家庭に水を恵みながら、下流部でさらに二つに枝分かれして海に注ぎ込んでいる。



写真1 - 吉野川の夕日



写真2 - 吉野川特産の青石でつくられた水制の石組み



写真3 - ゆったりと流れる旧吉野川

日本には、滝や湖それに川などがつくりだす雄大な景観が観光資源になっているところがある一方、福岡県の柳川のように身近なところを流れている水が人びとを引きつけ、人びとの心を潤している観光地も多い。

専門家によると、水の流れは大きく分けて、自然にできた「河川」と人がつくった「水路」の二つがあるそうだが、雄大な景観をつくりだすのは「河川」であり、柳川などのように腰をかがめて手を伸ばせば水に触れることができるのは「水路」であろう。

旧吉野川は、「河川」と「水路」の二つの特徴を兼ね備えている。かつては本流だった旧吉野川は、今では第十樋門で水量が調節されて水路の役目を果たしている。洪水の心配も大幅に減った。この結果、流域沿いの藍住町などは、徳島市のベッドタウンとして人口が増えつづき、水辺にまで住宅地が迫っている。

その一方で、ところによっては川幅が2～300メートルもあって、田畑が広がる中をゆったりと流れ、かつて吉野川の本流だった面影が色濃く残っている。

このように、人がつくった「水路」の特徴と雄大な景観をつくりだす「河川」の風格も兼ね備えているのが、旧吉野川だ。だが、その魅力について地元の人たちからもほとんど注目されていない。

また、吉野川の下流域には、旧吉野川のほかに、夏冷たく冬暖かい湧き水で有名な江川や途中で一度流れが消える飯尾川などめずらしい川がある。これらの川は、いずれも吉野川に堤防がない時代に、洪水のたびに流れをかえてきた名残といわれている。

これらの川のすばらしさを改めて掘り起こし、水辺の復活につなげなければならない。そうすれば、吉野川下流域一帯は、一大水郷地域として新たな魅力を加えることは間違いない。

5 源流への旅

吉野川の源流が突き止められたのは、それほど古いことではない。平成2年、今から13年前のことである。それまで吉野川の源流は、古文書や地元の伝承をもとに、四国山地の中央部にある瓶ヶ森(標高1897メートル)の頂上近くにある神鳴池だと伝えられてきた。

しかし、四国地方建設局(当時)が、専門家による吉野川水源検討委員会を組織して、数回にわたって、現地踏査を行った結果、神鳴池には谷川に通じる沢がないことが確認された。

そして、瓶ヶ森と東隣りの西黒森山(標高1861メートル)から、それぞれ流れ出る沢が合流している標高1200



写真4 - 異常出水による被害樹木(高知県白猪谷 平成11年10月)

メートル付近で、常時水が湧き出ている地点のあることが確認され、吉野川の源流点として断定された。四国山地の東南斜面、高知県本川村の白猪谷^{しらいたに}である。

私が吉野川の源流を初めて訪れたのは、平成11年の秋である。源流点^{しらいたに}が突き止められてから9年後のことであった。吉野川源流をはぐくむ会のメンバーと一緒に源流行であった。

その時は、季節はずれだったせいか小鳥のさえずりもなく、せせらぎの音だけが、あたりの紅葉に染み通るように聞こえていた。

そこは、木々がまばらで、明るい渓谷という感じだった。また、奇岩怪石もなく、深山幽谷という趣もなかった。私が想像していたのとは違って、源流は南斜面に面したごくありふれた溪流だった。

そうした中で異様に感じられたのは、渓谷のあちこちで、谷沿いの木々が根本から1～2メートルの高さのところまで皮がはがれ、白い肌を見せていたことであった。中には、直径7～8センチの流木が、立ち木に巻きついて折れ曲がっているのもあった。

その年は、吉野川は例年になくたびたび大水に見舞われた。下流では、洪水時に潜り、水が引くと再び姿を現す潜水橋(高知では沈下橋という)が流されている。源流域で記録的な豪雨があったのに違いなかった。

激流に押し流されてきた大小の石が、渓谷のあちらこちらに堆積していて、流路がすっかり変わっているようであった。渓谷全体がすっかり洗い流されて、苔ひとつなく、なんとなく白っぽい感じであった。それが私が想像していたより源流を明るい感じにしていたのだろう。

源流点には、ステンレス製のモニュメントが設置されていた。そのすぐ横の岩の間から清水が湧き出るように流れ出ている。

このモニュメントは、直径80センチ程度の球形である。

一滴の水をイメージしたもので、大河も一滴の水からはじまることを表している。四国大学の井上俊作教授が制作し、平成3年に建立された。

また、一滴のしずくの中には、四国の地図がくっきりとかたどられていて、吉野川が四国に限りない恩恵を及ぼしていることを象徴している。

これを書いていて、面白い逸話を思い出した。吉野川上流に建設された早明浦ダムの湖畔に、「四国のいのち」と刻まれた大きな石碑がある。早明浦ダムは、四国総合開発の要として建設された。昭和50年から運用がはじまり、香川県をはじめ四国4県の水をまかなっている。

建設がはじまった昭和38年は、日本が高度経済成長の真っ只中にあった時であった。「四国はひとつ」のスローガンのもと、早明浦ダムの建設が進められた。このため、ダム湖畔の石碑には、当初「四国はひとつ」と刻まれる予定だった。しかし、当時の高知県の溝淵増巳知事が、それに強く反発し、結局、「四国のいのち」に落ち着いたという。

溝淵知事は、経済開発一辺倒の意味合いが強かった「四国はひとつ」のスローガンに抵抗し、人間的な立場からやむを得ずダム建設に協力したことを訴えたかったに違いなかった。

全国の山村はどこも事情は同じであろうが、この早明浦ダムのある高知県嶺北地方も、林業不振による森林の荒廃や過疎・高齢化による地域の衰退などさまざまな課題が山積している。溝淵知事も草葉の陰で、「こんなはずではなかった」と嘆いていることだろう。

6 高まる源流への関心

平成6年夏、四国は未曾有の渇水に見舞われた。「四国の水がめ」といわれ、また、「四国のいのち」ともたたえられる早明浦ダムが完全に干上がり、早明浦ダムの水に頼っている高松市では、当時「たかまつ砂漠」といわれるほど水不足に悩まされた。

早明浦ダムの湖底に沈んでいた高知県の旧大川村役場も、およそ20年振りにその姿を現した。その様子が、テレビで全国放送されると、早明浦ダムには、連日、大勢の見物人が訪れた。

この時、下流の徳島市で「吉野川源水をはぐくむ会」が結成された。「上流の山村社会の崩壊が森林の守り手を奪った。その結果、山が荒れ、異常渇水につながったのではないかと、下流の住民が気づいたのである。

源水をはぐくむ会(現在会員数約330人)では、年1000円の会費を募り、その全額を吉野川源流域の5ヶ町村で

結成している高知県嶺北広域事務組合に毎年贈っている。「上流の人たちの山を守る努力を決して忘れません。下流に住む私たちのささやかなお礼の気持ちです。」と…………

これがきっかけの一つになって、吉野川下流域でも、ようやく上流への関心が高まり、今では、さまざまな市民団体が源流域の植林などに取り組むようになった。

徳島市の住民組織「新町川を守る会」では、「3001年の森づくり」と名付けて、源流域でブナなどの広葉樹の植林活動に去年から取り組んでおり、今年も、この4月に2回目の植林を行った。

7 残された課題

吉野川といえば、これまでは奈良県の吉野川を思い浮かべる人も多かっただろう。だが、三年前に行われた第十堰の可動堰化の是非をめぐる住民投票によって、徳島県の吉野川が一躍全国的に有名になった。この投票結果を受けて、可動堰化計画は白紙撤回され、現在、第十堰問題は宙に浮いた形になっている。

しかし、この問題は、今後の吉野川のあり方を決める上で、避けて通れない。川の歴史は、常に政治とのかかわりの歴史である。第十堰の可動堰化の是非をめぐる問題は、選挙のたびに争点の一つとして取り沙汰され、今も流域住民の意識の中に滓のごとく沈殿している。

流域住民全体の合意を得ながら、この問題を解決しないかぎり、新しい徳島をつくる活力を生み出すことはできないだろう。

(写真提供：1、田村善昭氏 他、筆者)